

口永良部島の火山活動解説資料（平成 25 年 6 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しています。しかし、新岳火口内では噴気活動が続いており、火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに注意してください。
平成 24 年 1 月 20 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 6 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 1、図 3-①⑥）

新岳火口の噴煙活動に特段の変化はなく、白色の噴煙が概ね火口縁上 50m で経過し、最高で火口縁上 200m まで上がりました。

・地震や微動の発生状況（図 3-②③⑦⑧、図 4）

火山性地震の月回数は 76 回（5 月：217 回）と少ない状態で経過しました。震源は、新岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

振幅の小さな火山性微動が 2 回発生し、継続時間の月合計は 2 分（5 月：41 分）と少ない状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図 3-④、図 5、図 6）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 25 年 7 月分）は平成 25 年 8 月 8 日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 23 情使、第 467 号）。



図 1 口永良部島 噴煙の状況（6月7日、本村西遠望カメラによる）
 白色の噴煙が概ね火口縁上 50m で経過しました（最高 200m）。

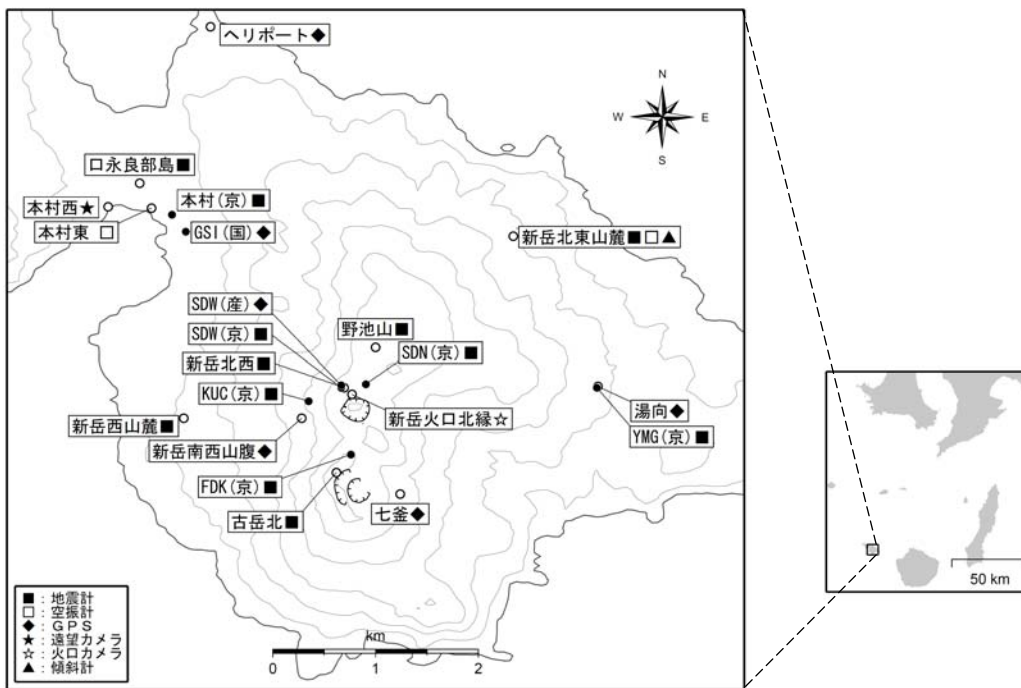


図 2 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 （国）：国土地理院、（京）：京都大学、（産）：産業技術総合研究所

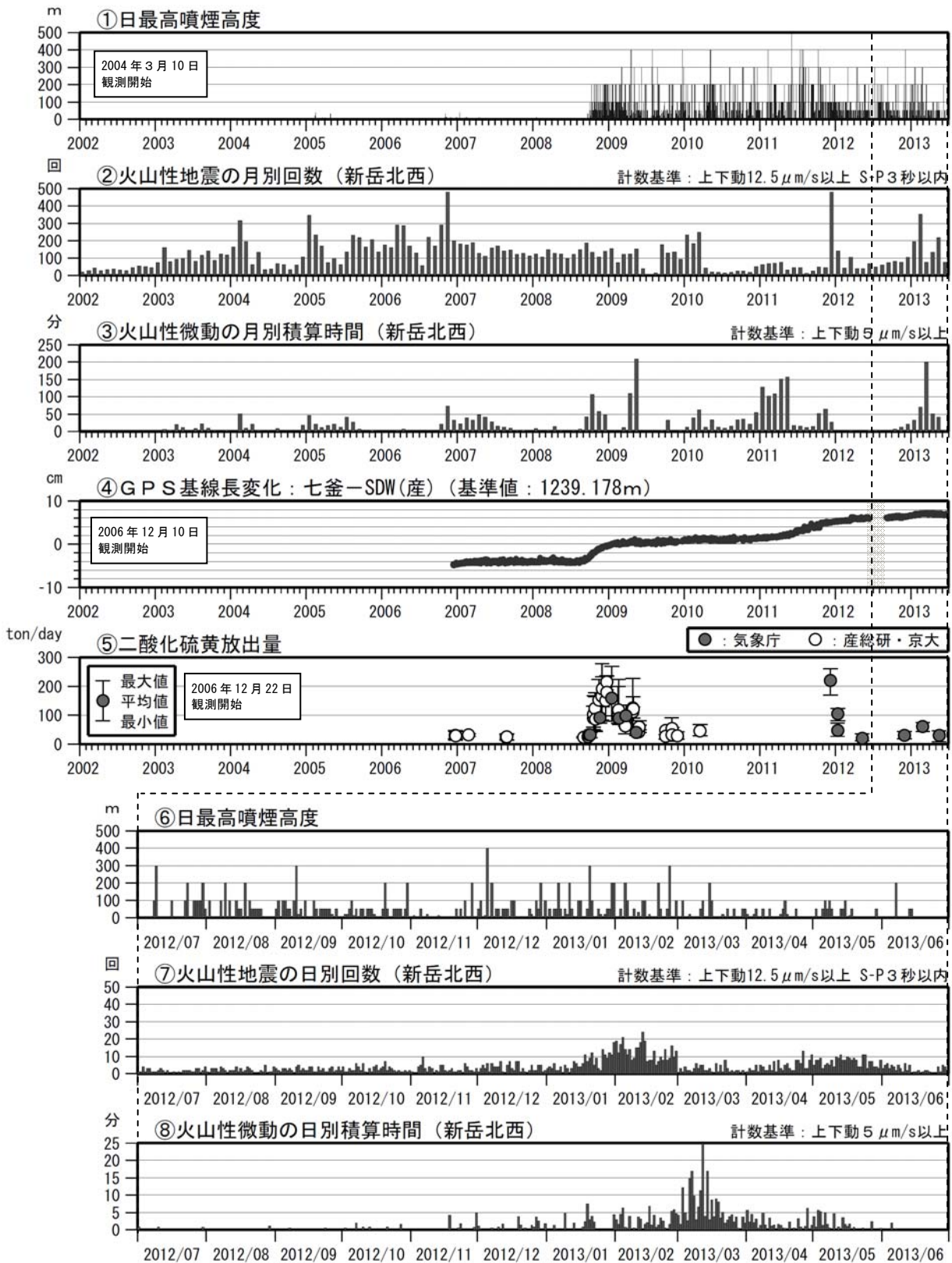


図3 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2013年6月）

< 6月の状況 >

- ・ 白色の噴煙が概ね火口縁上50mで経過し、最高で火口縁上200mまで上がりました。
- ・ 火山性地震の月回数は76回と少ない状態で経過しました。
- ・ 振幅の小さな火山性微動が2回発生し、継続時間の月合計は2分と少ない状態で経過しました。

図中④の基線は図5の①に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

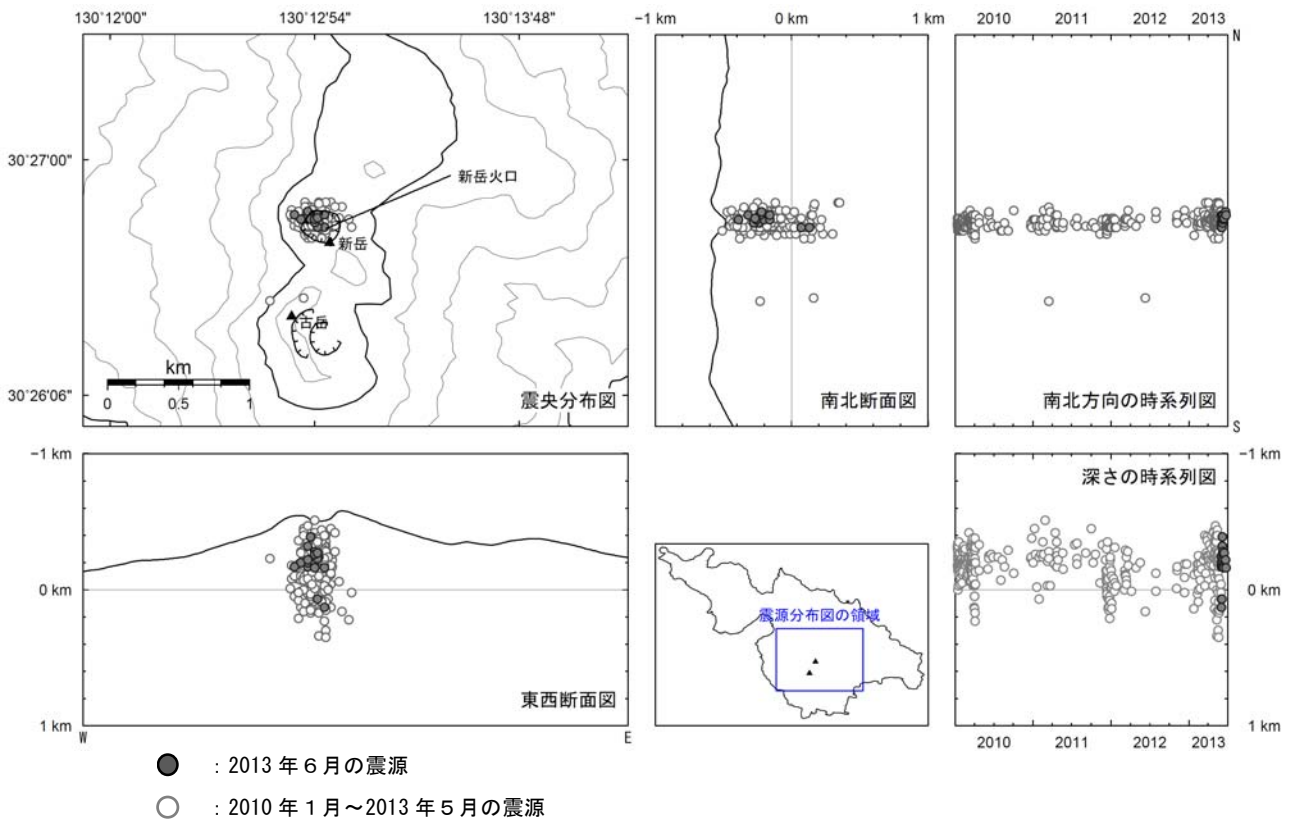


図 4 口永良部島 震源分布図（2010 年 1 月～2013 年 6 月）
 < 6 月の状況 >

震源は、新岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

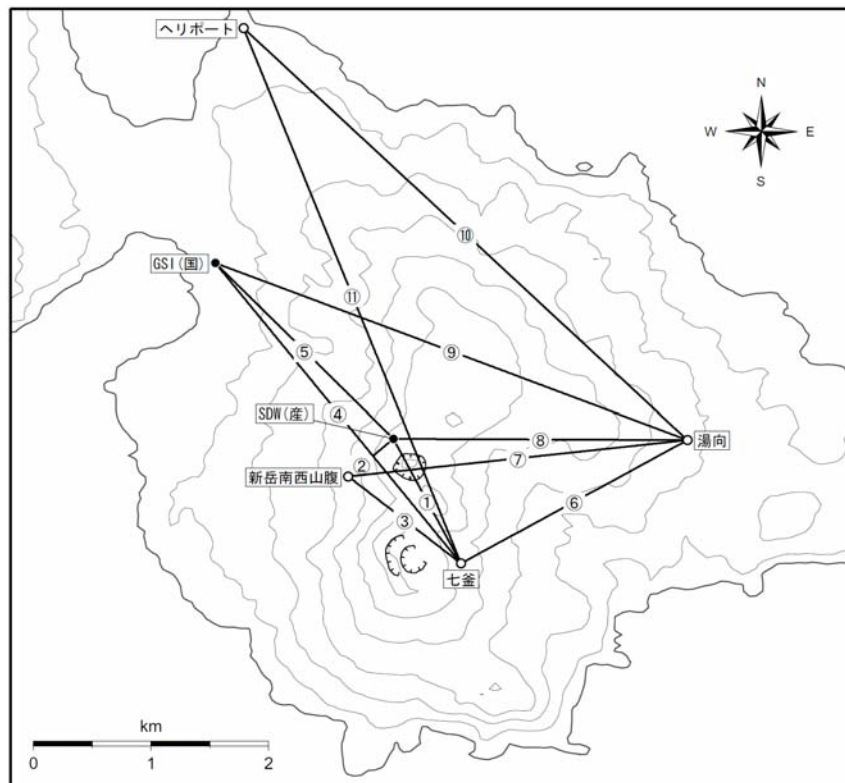


図 5 口永良部島 GPS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(産) : 産業技術総合研究所

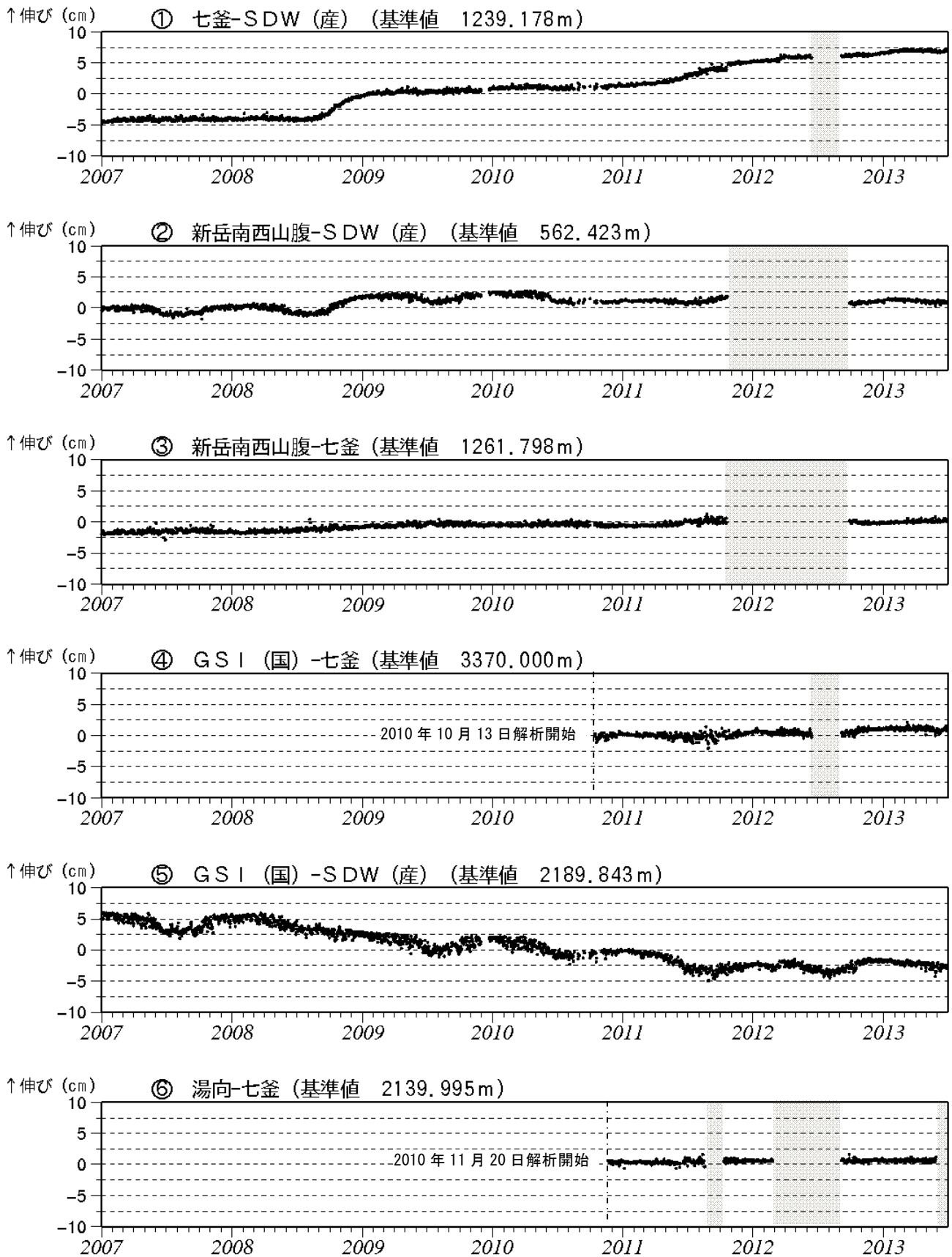


図 6-1 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化（2007 年 1 月～2013 年 6 月）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。これらの基線は図 5 の①～⑥に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。

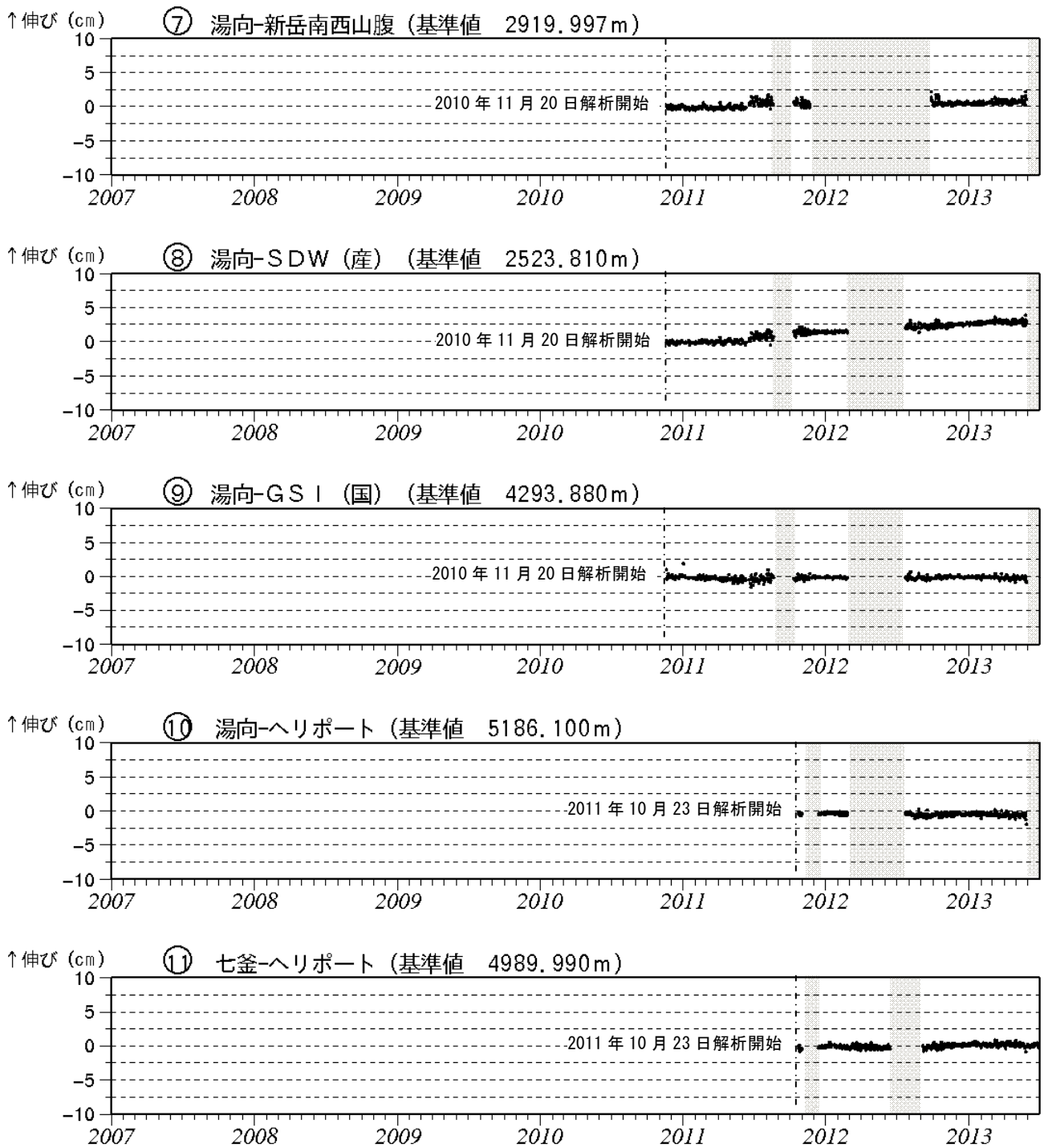


図 6-2 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月～2013 年 6 月)
GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
これらの基線は図 5 の⑦～⑪に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。